

本を選ぶ

NO.449 2022年(令和4年)10月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>植物たちのおしゃべり 続々

●図書館を離れて (第57回)



●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

植物たちのおしゃべり 続々

近所のひいきの店が立ち退きで閉店して、遠くに移転してしまった。唯一のお気に入りだったので、残念だ。農家から直接取り寄せる新鮮な有機野菜たちが炭火焼きで供される。野菜はこんなうまいのかと、口にする度にうなってしまう。看板商品の豚肉の炭火ローストにひけをとらない。生野菜をサラダとして出せば手間も減って経営効率が上がるだろうと思うのだが、焼くという手法が野菜の硬い細胞壁を壊して、野菜本来のパワーを引き出しているのだろうか。

最近、他にも理由があって、知人の家族が苦勞して始めた有機栽培の小さな農園から野菜や米を取り寄せるようになった。新鮮だからというのもあるが、薬物であれ根菜であれ味が濃くてあまい。野菜たちに添えられたニュースレターには、季節や異常気象との闘い、雑草や害虫との果てしのない格闘が淡々と綴られている。

どんなものを食べれば健康にいいのか、科学的に証明されたと胸を張る本を読んでみた。すでに基本とするデータが5年以上古いと思われるが、大きな差はないと思われる。『世界一シンプルで科学的に証明された究極の食事』(津川友介著／東洋経済新報社 / 2018) 信頼できると思われるラ

ンダム化比較試験を先ず対象として選ぶ。このランダム化比較試験とは、研究対象となる人を2つのグループに分けて、片方のグループだけに健康によいと思われる食品を摂ってもらい、もう片方のグループには摂取しなくてももらう方法である。そしてランダム化比較試験をさらに複数まとめて対象とする研究手法であるメタアナリシスを用いているのがこの本の特徴で、科学的なエビデンスがかなり強いらしい。著者はカリフォルニア大学の内科学の現役医師である。

一例をあげれば、“白い炭水化物は体に悪い” “牛肉、豚肉、ソーセージやハム” は健康に悪いとの結論を導く。米なら玄米を、パンなら全粒粉を選ぶなど茶色の炭水化物を推奨する。また食品の成分だけにこだわると、逆に悪い結果をもたらしかねないという警告もある。緑黄色野菜や果物の摂取量が多い人は胃がんや肺がんになる人が少ない一方で、そこに多く含まれている成分βカロテンだけを摂ると逆にがんになるリスクが高まるそうだ。また果物を丸ごと摂れば糖尿病を予防するが、フルーツジュースだと逆にそのリスクは高くなる。あくまで野菜や果物を丸ごと摂取するのがお奨め。

津川医師の研究結果のひとつに、農薬や化学肥料を使った野菜・果物を食べているグループと有機栽培のそれを摂っているグループとの間に健康に関しては著明な差は見られない、という結論があった。正直に言うとこれは意外だった。それでも、やっぱりうまいものはうまい。だって、有機栽培の野菜の力(成分?)は質が違うと思うのだ。(埜村 太郎)

図書館を離れて (第57回)

— 時代小説の中のお仕事女子⑤ —

並木 せつ子

前回までにとりあげた師匠・医者、私の読んだ「お仕事女子」の中では比較的多い職業だったが、それより何より多いのは料理関係だろう。そもそも私が時代小説を読むきっかけになったのは、高田郁の『みをつくし料理帖』だった。大坂から江戸に出てきた主人公の滯が、自分の心星は料理だと見出してゆく物語である。

料理人

それに限らずお仕事女子という観点で時代小説を読むと、料理や食べもの関連の仕事を持つ主人公は多い。たいてい一膳飯屋や居酒屋のような小さな店で、料理人が別にいる場合もあるが、自らも料理をつくる。山本一力の『つばき』『だいこん』、坂井希久子の『居酒屋ぜんや』、高田在子の『はなの味ごよみ』、中島久枝の『一膳めし屋丸九』、竹中亮の『女神の料理人』をはじめ、書名をあげたら枚挙にいとまがない。一方、料理茶屋や旅籠などの大きな調理場は男の職場だったから、時代小説の女子たちも受け入れてもらうのが大変だった。しかしそういう環境の中で修業して、少しずつ料理に携われるようになり、やがて開花してゆくの「お仕事女子」の良いところである。たとえば宇江佐真理『おはぐろとんぼ』のおせん、秋川滝美『きよのお江戸料理日記』のきよ、柴田よしき『お勝手のあん』のおやすなどのように。吉原という特殊な場で料理を生業とする出水千春の『吉原美味草紙』、神楽坂淳の『ありんす国の料理人』というものもある。

菓子職人

同じく男の職場だった菓子作りの場で修業中なのが、中島久枝『日本橋牡丹堂菓子ばなし』の小萩と、篠綾子『江戸菓子舗照月堂』のなつめ。料理にしても菓子にしても、創意工夫をこらし“心をこめた”仕事で、客の評判をとり才能を認められるようになる。この予定調和が鬱陶しい気持ち

の時にはありがたい。また料理や和菓子の場が次々登場する点でも楽しめる。この分野に人気がある（出版点数が多い）理由が何となくわかるような気がする。ただ、読んでいて主人公たちが腕をあげているという実感が伝わってこないのは残念。“絶対嗅覚”のような生まれ持った素質だったり、創意工夫に長けていたりということが多いのである。「腕をあげた」「一生懸命」という言葉でなく、文章や話の流れ全体で主人公の熟練度を感じ取れたら、もっとおもしろいと思う。

職人

料理人は今も職人のひとつだが、江戸時代、「職人」という言葉は「仕事を持つ人」全体を指すことが多い。1855（安政2）年刊の『流行職人盡』には20人以上の人物が描かれているが、「仕立屋」「左官」「大工」「家〔ママ〕根屋」「建具屋」「瓦師」とともに、「こま物や」「金かし」「坊主」「はなしか」など、今では職人と呼ばない職業も入っている。ここに描かれた人物のうち女は「げいしゃ」一人だった。

女の職人だけが描かれた『花容女職人鑑』（江戸後期か？北川国貞・蓬萊山人作）を見ると、いわゆる職人は扇をつくる場面の「地紙折」と「女絵師」、「針妙」、「髪結」くらいだろうか。奉公人としては「なかみ」、「祐筆」がいる。多いのは水商売で「傾城」、「かむろ」、「芸者」、「茶や女」、「矢場女」、「舞子」、「浄瑠璃」、「人形遣い」、「ト者」などがある。「琴の師」、「和歌の師」、「胡弓の師」、「花の師」など習い事の師匠も目につく。現実はこちらにも描かれているが、「鮎売」、「針売」、「糊売」、「花売」などの物売りや、子守、洗濯女のような賃仕事につくことが多かったようである。女が職人になるのは——京都など織物業のさかんな地域はともかくとして、非常に難しいことだった。いたとしても希少な存在だったにちがいない。一方、時代小説の主人公には結構職人が多いのだが、どのようにして職人になれたのだろうか。

泉ゆたか『江戸のおんな大工』のお峰は、江戸城小普請方の御家人の娘。子どものときから大工仕事が好きで、父親の作事の現場について行って仕事を覚えた。父の死後、縁談を強いられたため屋敷を出て、町の大工として働き始める。

田牧大和『緋色からくり』の緋名は錠前師。緋名のつくる錠前は見事な細工と、盗人もお手上げのからくり錠で、世間では「緋錠前」と呼ばれていた。緋名には開けられない錠前など無い。こうした技は腕利きの錠前師だった父親から受け継いだ。

宇江佐真理『甘露梅』のおとせは、吉原遊郭で「お針」として住み込みで働いている。遊女の晴れ着や着物、夜具などを縫うのが仕事である。遊郭であることにためらいはあったが、夫を亡くした36歳の女が自活するには良い条件だった。前述の『花容女職人鑑』にあった、商家でやとわれる「針妙」や、武家にやとわれる「御物師」とともに裁縫の技術を生かした女の職業である（「針妙」「御物師」の雇用先については、本によって諸説ある）。「仕立て屋」も裁縫職人だが、大店の呉服屋から注文を受けるもので、ほとんどが男の職人だった。

西條奈加『千両かざり』のお凜は、4代続^{かざり}鋳職「椋屋」に生まれた。家具の飾り金具や簷などの細工するのが鋳職人である。凜は父親や弟子たちの仕事場で見ると、子どもの頃から好きでたまらなかつたが、<女は鋳師にはなれぬ>と言われ育った。だが凜に意匠の才を見出した父親は、みんなに内緒で仕事机を用意し細工の修業をさせてくれた。やがて凜は椋屋の5代目に。

今井絵美子『綺良のさくら』の綺良は鋳物師。盛岡南部藩主の側用人の娘。父が隠居ののち亡くなると、母は実家に戻り、頼みにしていた兄も流行病で亡くなった。一人になった綺良は自活の道を探して鋳物師になろうと決意し、鋳造所の見習いから始める。綺良の人生はこの後もずっと波乱万丈だが、鋳物の世界には意外にすんなりと入っている。

知野みさき『神田職人えにし譚』の咲は縫箔師。<刺繍一縫いと金銀の箔を糊で貼る摺箔を併せて裂地に模様を施すのが「縫箔」>である。咲は10歳のとき、縫箔師の弥四郎のもとに住み込み奉

公に出され、女中として仕込まれていたが、裁縫の腕が弥四郎の目に留まり、簡単な刺繍を教えてもらうと二年目には女中仕事の傍ら見習いとして仕事場への出入りを許され、三年目には弥四郎にとって初めての女弟子となった。師匠の弥四郎は男弟子と分け隔てなく接してくれたが、年頃になると咲の才能への嫉妬や恋愛感情もからみ、男弟子と一緒に仕事をするのは難しくなっていた。咲は独り立ちして、財布や巾着などの小物を中心に縫箔師として生きること。能装束のような大仕事をするのが夢である。

知野みさき『上絵師律の似面絵帖』の律は上絵師。上絵師は布や着物の白く染め残した所に、紋や絵を描くのが仕事である。律は上絵師の父親から手ほどきを受けその仕事を手伝ってきた。父親の死後は自分も「上絵師」の看板を掲げ、まずは小物の注文を受けるところから始めた。その傍ら奉行所の似面絵を描く仕事も請け負っている。

佐伯泰英『照降町四季』の佳乃は鼻緒職人。下駄の鼻緒のすげや古下駄のすげ替えをする。実家が鼻緒屋でずっと仕事を手伝って仕事を覚えた。駆け落ちをして3年ぶりに戻ってくると、鼻緒職人の父親は病気だった。佳乃は父親に代わり、店の仕事をこなしていく。この著者による「初の女職人が主人公の小説」という宣伝文句にひかれて読んだが、鼻緒職人の見習いとしてころがりこんだ侍・八頭司周五郎の存在感が強すぎて、主人公と思っていた佳乃の印象は薄い。

職人は徒弟制で、女は弟子にしてもらうこと自体が難しい時代だったのに、鋳物師の綺良と縫箔師の咲が見習いとして受け入れてもらったのは、師匠が男弟子と分け隔てなく接してくれる人だったからである。大工のお峰、錠前師の緋名、鋳師の凜、上絵師の律、鼻緒職人の佳乃は父親から、お針のおとせは母親から技術を学んだので、弟子入りという点では苦勞せずにすんでいる。

奉公人

『江戸の暮らし図鑑；女性たちの日常』（菊地ひと美著）によれば江戸の庶民の女性の生業で一番多いのは賃仕事、次に多いのは住み込みの女中奉

公である。この奉公は武家、商家ともにあり、大きく分けると上女中、中働き・中居、下女・端下になる、上女中は主に主人の側近くには仕える仕事、中働きは18歳から28歳くらいで家事、機織り、縫物、雑用全般が仕事、下女は洗濯、水汲み、飯炊きなどの仕事をする。他に生まれたばかりの子どもの世話をする乳母、少女の仕事である子守などもあった。商家への奉公の場合、男の子は年季奉公で商売に関わる仕事を続け出世していくが、女の子は店に出る仕事ではなく短期雇用だったようである。経済的に恵まれた家の女の子の場合、奉公は嫁入り修業の意味合いもあった。

このように奉公と言ってもいろいろで、奉公人が主人公といっても捉えどころがないが、まずは典型的な奉公人小説を。永井紗耶子の『大奥づとめ』である。大奥の中の様々な仕事に携わる女たちの中には水汲み、掃除、洗濯、駕籠担ぎなどの仕事もあって、これは「お末」の仕事。煮炊きを取り仕切るのは「御中居」の仕事。大奥では市井での名を捨て新しい名で呼ばれるが、御仲居たちは、お鯛、お鮎、そしてお蛸。必ずしも絢爛豪華な面ばかりではない大奥の物語である。桑島かおりの『江戸屋敷渡り女中お家騒動記』は短期雇用の女中として、武家の家などに奉公する菊乃の話。派遣先の家も、菊乃の家もそれぞれ問題をかかえている。

口入屋

奉公先を探す人と奉公人を必要としている店の間を取り持つのが口入屋。「桂庵」ともいわれ、主に短期奉公の下男下女や、武家の中間など斡旋する業者である。年季奉公の場合は口入屋を通さず親類・知己を頼ることが多かったという。この口入屋にも「お仕事女子」は進出している。

西條奈加『九十九(つづら)藤』のお藤は、うまくいっていなかった口入屋の差配を急遽まかされることになった。女の差配に手代をはじめ店の者たちは猛反発。店の方針を大転換するお藤の策は、まず武家奉公の中間と縁を断つことだった。杉本章子『起き姫』のおこうは、夫と離縁し実家に戻ったが自分の居場所はない。元奉公人のおとわが営む口入屋「三春屋」を訪ね雇ってもらうこ

とにした。病身のおとわから引き継いだ三春屋で、おこうは誠実に仕事をこなしてゆく。

宇江佐真理『昨日みた夢』のおふくは、亭主が突然行方知れずになり、実家の口入屋に出戻って居候生活をしている。店で仲介した女中に不始末があると代わりに働きに行くのだが、行く先々の家はそれなりの問題を抱えていた。

大原久澄『富久屋けいあん花暦』のお勢いは、祖父が開いた口入屋を、祖父の選んだ婿と一緒に営んでいた。ところが婿は突然姿を消す。お勢いは亭主の帰りを信じながら、富久屋を訪ねてくる女たちと向き合ってゆく。

桑島かおり『口入屋お千恵繁盛記』のお千恵は、元御家人の娘。兄が自害したことがきっかけで、失意の父は御家人株を売ってしまった。ほどなく父は亡くなり、お千恵は使用人たちの働き口を世話することに。その際、江戸で女が働くことの難しさを知ったお千恵は、女人専門の口入屋「百合花」を開いた。

雙六に見る女の一生

江戸時代に『新板娘庭訓出世雙六』『新版女庭訓振分雙六』『新板女教訓出世雙六』など、同じような名まえの雙六が何種も出版された。振り出しから上がりまでが女の一生や職業になっている雙六である。どれも版年は不明だが、同じ名まえでもよく見ると内容が違うので、繰り返し売り出されていたのだろう。一つ例にあげると、上の段から下の段へ「おめかけ」「おちうろう」「おしんぞ」「おつぼね」「おさん」「おはり」「手習いのお師匠さん」「おじゃれ」「はっち」「はりい」「やまのかみ」「乳母どん」「おすえ」「けいせい」「しうとめ」「のりうり」「ごぜ」「やりて」「花よめ」「げいこ(?)」「とりあげ」「髪ゆひ」「中はたらき」「おどり子娘」「おてんば娘」「子もり」と並び、それぞれ絵がついている(「おじゃれ」は宿場の客引き、「はっち」は「はっち比丘尼」のこと)。振り出しは「おどり子娘」、上がりは「万福長者極らくいん居」。これには「東西庵南北作、勝川春扇画、版元若狭屋与市」と印刷されているが、版年は不明。(?)は変体仮名の読みに不安があったので付した。興



味のある方は国立国会図書館、東京学芸大学付属図書館、教育図書館、東京都立図書館のデジタルデータが公開されているので画像を確認していた

だきたい。他にもいくつかの雙六を見ることができる。

この他に「いなかも」「きむすめ」「女いしゃ」「めしもり女」「お小姓」などの加わる雙六もあるが、生業も女の人生の折々を表す言葉もいっしょくたで、「いなかも」に至ってはわけがわからない。しかしどれも上がりはもれなく「万福長者極楽隠居（万福楽隠居）」。これだけは今も昔もあまり変わらない。（なみき せつこ）

*図版は『新板娘庭訓出世雙六』のデジタルデータ／東京都立中央図書館のサイトより許可を得て転載

<https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/auth/download/761c27a5e0dd3c7e1e371df6b4b28833>